



一般社団法人
メディカルスタディ協会

◇ 中島 慶八郎氏の医療ブッタ切り 第 24 回 「薬剤師を取り巻く環境」 ◇

文／中島 慶八郎 氏

薬剤師を取り巻く環境

A. 仕事場の変化

イ. 製薬メーカー

開発、学術、研究部門に一部必要なだけで MR には不要になってきた

ロ. 病院 (20 床以上)

8,000 軒を切る数となった、院内処方せんによる調剤業務はあるが、主体は病棟業務である。その中でチーム医療の中に参加する知識とコミュニケーション能力が問われる。

ハ. 医薬品卸

ほとんど必要ない

ニ. 薬局

2013 年現在、57,000 軒と言われているが、どんなに増えたとしても 60,000 軒が限度だと思われる。処方せん受取率は 2013 年現在で 70%と言われているが、この率は分業の限度であろう。

調剤は処方せん枚数に影響するので OTC やサプリメント、医療介護用具を取り扱ったり、いわゆるドラッグに転換するところが増加すると予想されるが、調剤以外では薬剤師は不要である。特に OTC の 2 類 3 類は登録保険販売員で十分である。IT 化の普及により、インターネットでの医薬品購入が可能になると、ますます薬剤師の必要性がなくなる。薬局が薬剤師の主たる仕事場であっただけに今後の変化には注目していく必要がある。1935 年ころの日本人の平均寿命は 40 歳であったが現在は男性 80 歳、女性 86 歳と、いまにも寿命が 100 歳にならんとしている。しかし、加齢による機能低下や難病、障害を持った人もそれなりに長寿となる。がん、認知症も生活習慣病と言われる時代になった。薬局に勤務する薬剤師はこれらの人々の生活をサポートすることが必須となる。すなわち、睡眠、食事、運動、心のケア、これらにどれだけ関与できるのか？である。患者さまの服用薬の一元管理は当然のことであり、医療人としての薬剤師は正に薬剤師法にある国民の健康に資することが義務なのである。

ホ. 在宅

高齢化に伴い、自宅や施設で療養、また生活する人が増加する。薬剤師は他職種と連携して在宅患者をサポートせねばならない。本来、薬剤師の業務は店舗を拠点とすること。となっているが、この在宅業務は一步前進したものと言える。医師また、看護師がどこでも仕事ができるように薬剤師もそうあるべきなのではないか？訪問薬剤師の出現もそう遠くではない。国民が健康相談を出来る専門家として薬剤師を必要としてくれないと薬剤師の仕事は無くなるのである。

B. 薬剤師の数

タンス薬剤師を含めて2013年現在 26万人と言われ、医師30万人に対し、先進国では多い。そのうち16万人が薬局勤務と言われている。1年に約7500人の薬剤師が誕生しているが（国家試験合格率50%）、最近では合格者には女性が多く、田舎は嫌だ、残業は嫌だ、土日祝日の勤務は嫌だ、在宅訪問は嫌だ、という薬剤師が増加しているため、薬剤師はまだ不足している。と言われ、60歳70歳の薬剤師がいまだに仕事をしている現状である。

2050年には日本の人口が減少する（約8,000万人を切る）と予想されている今、薬剤師は如何にあるべきかを真剣に考え行動することが必要である。処方せん枚数もこれ以上の増加は見込めない、ジェネリックの多用により処方せん一枚当たりの単価は現在の7000~8000円から下がるであろう。セルフメディケーションの普及により、OTC、サプリメント等の説明や、インフルエンザ、風疹等のワクチンの説明も求められる。放射能、PM2.5への対応など、あらゆる薬事衛生の分野に仕事を拡大する（それが本来の業務である）ことが必要となる。

C. まとめ

IPS細胞や、DNAによるオーダーメイド医療等々、高度に進歩する医療に薬剤師が医療人として対応していくためには、常に患者様、他職種の方々と接して現場の変化を敏感に捉えて行動する以外にはない。